## 特定非営利活動法人 吉里吉里国　北村裕人（きたむらひろと）さん

### 大槌町に移住して9ヵ月、山と向かい合う日々

昨年4月に福岡県から大槌町に移住し、NPO法人「吉里吉里国」で働く北村裕人さん。現在は仮設住宅で一人暮らしをしながら、日々、町内の山へ足を運び、伐木作業に汗を流しています。

北村さんは大学を卒業してから2年間、青年海外協力隊員としてタンザニアに赴き、現地の中学校で数学を教えていました。帰国後は大学院に進学し、震災翌年に被災地を訪れたそうです。

「大学まで何の不自由もなく暮らしていました。初めて被災地を訪れたとき、各地を目で見て肌で感じました。その後、大学院に戻ってからも『自分には何が出来るのか』と考える日々でした」

大学院修了後、被災地沿岸部で一次産業に従事したいと考えていたところ、青年海外協力隊OBとの縁で、吉里吉里国代表理事の芳賀正彦さんと出会い、大槌への移住を決意したといいます。

「夏場は大変でした。暑さの中、長袖、長ズボンにヘルメット姿でチェーンソーや道具を担いでの山の作業ですから」と苦労も多いようですが、「自分が整備をして、暗かった山林に陽の光が入る光景を見るとやりがいを感じます」と話します。

「先輩方は10年後、20年後の山のイメージを持って作業しています。ベテランの先輩の目線の先を必死で追いかけています」と目を輝かせ、「まず技術や経験を身につけ、一日も早く戦力になりたいですね」と目標を高く掲げます。

仮設住宅の生活では、ご近所の方との触れ合いも増え、最近は仕事から帰ってくると、近所の方から野菜や魚をもらうこともあるといいます。「自炊は苦になりません。毎日の弁当も自分で作ります」と笑顔を見せます。

ギターが趣味という北村さんですが、子どもとの触れ合いも大好きで「将来は地域の子どもたちの学びの場などにも携われるようになりたいですね」と地域活動に魅力を感じています。それでも「まずは一人前になる事です」ときっぱり。誠実な人柄と真っ直ぐな目が印象的でした。

北村 裕人さん

## 「復興を支える人　支える団体」

### ど真ん中・おおつち協同組合

### チャレンジしながら、大槌の魅力発信をしていく

「水産業の復興なくして大槌町の復興は成し得ない」。その強い思いから震災翌年の平成24年、水産物の加工・販売を手掛ける芳賀鮮魚店（芳賀政和代表）、浦田商店（浦田克利代表）、小豆嶋漁業（小豆嶋敏明代表）、ナカショク（齊藤勲代表）の4社で設立されたのが「ど真ん中・おおつち協同組合」です。「海の幸のブランド化」による全国展開を目指し、4社の経験や技術を結集。地域の早期復興と発展に貢献しようと、各事業者が連携しながら高付加価値商品の販売などに取り組んでいます。

初めは共同仮設工場から第一歩を踏み出しました。昨年3月には、魚市場前に活動拠点となる組合施設が完成しました。大槌の水産業復興を願う全国各地の約5千人のサポーターの支援にこたえるべく、大槌の海の魅力を発信し続けています。

組合施設では、4社が手掛けている商品をはじめ、町内の団体が作っている手芸品や木製コースターなどを販売。新巻きザケづくりの体験イベントなども開催しています。観光客や町民の方々のための交流スペースもあり、復興に向けた工事が進む地域の中で憩いの場となっています。

メーンは店頭販売ですが、昨年11月に販売を始めたオリジナル弁当も評判になっています。自慢の海産物を中心に日替わりのおかずが楽しめる内容で、価格も430円とお手ごろ。組合施設ができた当初から、外観のせいか「ここは食堂ですか？」「何か食べることはできますか？」という声が絶えなかったそうで、組合施設のスタッフの方は「そのたびにお断りするのが心苦しかった」と振り返り、「海の近くには飲食店がなく、復興工事で一生懸命働いている方々から弁当を求める声がありました。地元の産物を楽しんでいただくことで、復興の一助にもなれば」と思いを込めます。

三陸海岸のほぼ真ん中に位置する大槌で立ち上がった「ど真ん中・おおつち協同組合」。海の魅力と感謝の気持ちを伝えるため、今後もチャレンジが続きます。

ど真ん中・おおつち協同組合の皆さん





# 「三陸ベニマル」
## ～“大槌産”にこだわり“大槌産”を全国へ発信～

三陸ベニマルは、昭和51年に海産物や魚介類などを取り扱う商店として吉里吉里で開業し、今年で開業40年を迎えます。

震災後、もっと大槌の食材をアピールしたいという思いから「あさひ堂」という新しいロゴを作成し商品のＰＲに励んでいます＝上写真。

そこで、三陸ベニマル営業担当の倉本朝日さん＝左写真＝に震災後の苦労や復興への取り組みについて伺ってみました。

### ■震災後の苦労

「私は岩手県内の民間企業で営業をやっていました。営業を行っているうちに『いい食材は宣伝方法を工夫するだけで売上が伸びる』ということを実感したため、地元に帰って大槌のものを宣伝しようと決意しました。

東日本大震災が起きたのは大槌に戻ってから３年ほどたった時でした。震災後は物を仕入れるのに大変苦労しましたが、自分たちの魚を待ってくれている人がいると知り、一日でも早い再開を目指して全力で取り組みました。結果、震災が起きてから２週間後の３月末には移動販売を再開することができ、お客さまに魚を届けることができました。その際、魚だけでなくお客さまの要望に対してできる限り応えたいと思い、魚以外の物も仕入れては届けていました。あの時のみなさんの笑顔は一生忘れることはないですし、それが今の私たちの原動力になっています」

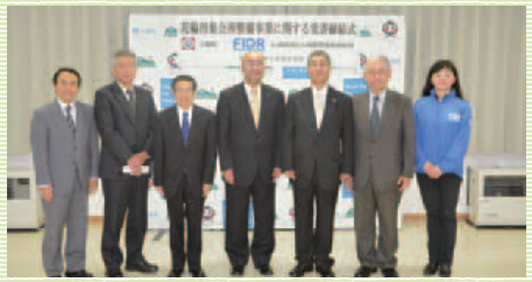
### ■復興に向けての取組み

「もともと大槌町の魅力を全国に広げたいという思いからインターネットを使った販売を行っていましたが、震災後は新たにフェイスブックを開始し、商品の魅力や大槌の復興状況を定期的に発信しています＝右上写真。また、町の補助事業を活用して新たに加工場を建設したことにより、作業効率が上がり日々復興に向かっていることを実感しています。大槌町の海産物は品質がよく魅力的なものが多いです。これからも地元大槌の食材にこだわり続け、大槌の魅力を発信していきたいと思います」

三陸ベニマル
〒028-1102 大槌町赤浜一丁目226　TEL 0193-27-8980

## Topics　花輪田地区に悲願の集会所を整備

震災の影響もあり世帯数・人口が増加している大槌町花輪田地区に集会所が整備されることになり10月30日、整備を支援する公益財団法人国際開発救援財団（FIDR）と町の間で覚書が締結されました。

建設予定地は花輪田自治会が選定した国道45号に近い場所で、建物の設計・建設についてはFIDRの寄付が活用されます。来年度中に、敷地面積約1200平方メートルに木造平屋建て（延べ床面積165平方メートル）１棟が建設される予定です。

締結式では、FIDRの江川信彦常務理事と平野公三町長が覚書に調印。これまで整備の要望を重ねてきた自治会関係者も立ち会いました。